

富山民藏「三たび満蒙新國家國字問題を論ず」『國語教育』第18卷第4号 pp. 72—76

昭和8年4月

朝鮮

- ・ 朝鮮語学会『朝鮮語綴字法統一案』B. 6. 60p. 昭和15年 朝鮮語学会

安南

太田正雄「安南における國語國字問題」『國語運動』第6卷第5号 pp. 8—18 昭和17年5月

「太田博士を囲んで懇談」同誌 pp. 18—21

シ ャ ム

山縣三千雄「泰國における言語上の諸問題」—日本語普及の爲の参考として—『日本語』第1

卷第1号 pp. 45—51 昭和19年1月

内容項目は次の通りである。

- 一、英語普及の歴史と現状
- 二、^泰泰語の尊重と普及運動 (pp. 48—50)
- 三、日本語普及の現状と将来

南 方

三吉朋十「南方共栄圏の言葉など」『國語運動』第7巻第4号 pp. 8—17 昭和18年4月
フィリッピンなどについて少しふれている。

宮武正道「インドネシア語会議」『國語運動』第2巻第4号 pp. 36—38 昭和13年10月

宮武氏によれば、「現在蘭印の標準語となっているマレー語の混乱状態を整理し、眞に蘭印即ち土着人側の言うインドネシアの國語とさせたい目的のもとに、言語の整理を計画している土着人インテリの第一回会合」の紹介である。論議された事項が八項目掲げてある。

なお、マレー語のつづり字法の改正運動に関しては、斎藤秀一氏発行の『文字と言語』第13号に、マレー語のローマ字化の歴史については、その第2号に宮武氏の論文が発表してある由。

宮武正道「ジャバ語の國語改良運動」『國語運動』第4巻第12号 pp. 39—41. 昭和15年12月

蒙 古

保科孝一「ブリヤト蒙古共和國のローマ字採用運動」『國語教育』第16巻第3号 pp. 76—78

昭和6年3月

最初の部分を引用して次に記す。

在ブラコエスチェンスク領事代理泉顯藏氏より外務大臣にあて報告されたブリヤト蒙古共和國におけるローマ字採用運動の概況をつぎに掲げる。

「ブリヤト」蒙古共和國ニオケルローマ字採用運動ニ関スル件

「ブリヤト」蒙古共和國ニオケルローマ字採用運動ハ軌近漸ク具体化シタル模様ニテ客月二十日発行「ブリヤト」蒙古「プラウダ」紙上左記ノ如キ新「アルファベット」協会第一回總會宣言文掲載アリタルニ付何等御参考迄訳出茲ニ報告ス

「ブリヤト」蒙古新「アルファベット」協会第一回總會宣言（一九三〇年十月九日總會決定）。
（以下省略）

トルコ

「トルコのローマ字採用（タイムスウィークリー所載）」『國語教育』第13巻第12号 pp. 66—67

昭和13年12月

トルコの新アルファベットを表示してある。

保科孝一「新トルコ國におけるローマ字採用運動」『國語教育』第14巻第8号 pp. 67—70

昭和4年8月

内容は次の三つのものの紹介である。

- ・「土耳其に於ける羅馬字採用に関する件」（昭和三年八月三十一日付 在土 小幡特命全權大使より田中外務大臣あて報告）

- ・「土耳其新國字普及政策に関する件」（昭和三年十二月二十八日付 在土 芦田臨時代理大使より田中外務大臣あて報告）

- ・「新興トルコ訪問」『東京日日新聞』 昭和4年5月20日

徹底した改革振り 首都アンゴラの文化 一千年のラテン文字も撤廃さる
モスクワ十七日発電 布施特派員

星野行則「トルコが旧文字を廃してローマ字を用いるにいたった事情」『國語教育』第17巻第11号 pp. 53—60 昭和7年11月

星野氏は、ケマルパシャの改革を四項目に分け、その一つとして「トルコの旧文字をやめてローマ字を採用したこと」（一九二八、十一、一、採用令を発した）をあげている。そして、「旧トルコ文字の学習上の困難及純トルコ語発達の障害」および「ローマ字採用に伴う支障」について述べている。

次に、「トルコにてローマ字採用に関する準備施設」の項において次の五つにふれている。

- 一、学校教科書のローマ字改訂およびその実施
- 二、公用文書にローマ字採用の方法
- 三、辞書編纂事業
- 四、古來の図書文献のローマ字化に対する政府の施設
- 五、看板、標札、掲示、廣告に關すること

次に「ローマ字実施に対しその教習の実狀」を述べ、更に「トルコの國字改良を行った後の結果」の項において、次の七つのことを述べている。

- 一、文字を解するものの数の増加
- 二、教育上の効果

- 三、純トルコ語の成長
- 四、反対者の無くなったこと
- 五、術語の統一
- 六、國字改良と新聞紙
- 七、機械利用の利益

- YENİ TÜRK ALFABESİ//İmlâ ve Tasrif Sekilleri// Türk dili encümeninin karar ve tensibi ile tertip edilmiş-tir//Devlet Matbasi//1928// 15×22.5cm. 仮 40p. 1928年 (昭和3年)
トルコ スタンプール発行
平岡伴一氏によれば、「1928年8月15日トルコにおけるローマ字調査委員会の報告が完成し、これによって僅か二日のうちにケマルパシャ大統領はローマ字採用に決定した。(エニ-チュルク アルファベシー) その8月25日に出版されて、僅か一週間のうちに六十万部を賣り盡したと云はれたのが、このローマ字手ほどき「新トルコ文字」である。」
- 花園兼定「新國字の一年間」『東京日日新聞』 昭和5年3月13日, 16日
- Tanakadate-「Toruko ni Rômazi wo tadunete Hikôki no Tabi」『Rômazi Sekai』
第20卷 第11号 pp. 332—336 ; 第20卷第12号 pp. 369—374 昭和5年11, 12月
- ホシノ ユキノリ 「トルコノ國字改良視察概要」『カナノヒカリ』第122号 pp. 2—11
昭和7年2月
- 磯村武亮「トルコの國語・國字問題の現在」『國語運動』第3卷第6号
pp. 44—49 昭和14年6月

この一文は、昭和11年7月、日本を出発してトルコにおもむき、そこの日本大使館附武官として勤務すると二年六ヶ月、昭和14年4月13日に帰朝された磯村砲兵大佐のおみやげ話である。

項目は次の通りである。

トルコ革命の指導精神

トルコの文字

アラビア文字からローマ字へ

十年後の結果

私の意見

トルコの言葉

私の意見

トルコの将来

土岐善麿『國語と國字問題』昭和22年2月 春秋社

「七、傳統と國民性 pp. 143—154」のところでトルコのことについている。

- ・ N.-K. 生「トルコがローマ字を」『ローマ字世界』昭和3年12月
- ・ 内藤智秀「トルコのローマ字採用」『ローマ字世界』昭和4年8, 9月
- ・ 星野行則『トルコの國字改良実情視察報告書』B.6. 17p. 昭和7年3月 カナモジカイ

ロシア

- ・ 金田常三郎「ロシア文字の変遷」 中村莊太郎、古田信治著『新露西亞語講話』附録
8 p. 昭和4年3月再版
- ・ アリエフ『サヴェート諸民族の文字のラテン語化』（サヴェート文化叢書、民族文化の発展） 昭和7年4月
- ・ 原久美「サヴェート同盟における言語教育と民族文化」『教育』 第16号 昭和8年1月
- ・ Takahasi-Seisirô. 「Tatâru-go no Rômazi-undô ni tuite.」 『Rômazi no Nippon』 第4巻第6号 昭和3年6月

イギリス, アメリカ

安藤正次「英米のスペリング改善運動」『國語教育』 第11巻第12号 pp. 64—72 大正15年12月
大正15年3月、イギリスの「簡易綴字協会」(Simplified Spelling Society)で、英語のスペリングの問題を考察するための委員 (Royal Commission) を任命されるようにという請願書を英國首相に差出した。これに対し、賛否両論があり、結局「考慮しておこう」ということになった。なお、この中に、國語運動の団体と機関雑誌の名があげてある。

文部省『英國における語法上の術語制定運動』 大正6年10月(序) 文部省

序文は次の通りである。

一、本書ハ英國ニオケル語法上ノ術語ヲ統一セントシテ起レル運動ノ顛末ヲ調査セルモノニシテ、該運動ニ関スル同國語界ノ狀況ヲ紹介シ、國語並ニ英語教授上ノ参考ニ資セントスルモノナリ。

二、本書ノ調査ハ当局國語調査主任保科孝一及國語調査囑託安藤正次ノ担当セルモノナリ。

大正六年十月

文部省普通学務局

なお、前編は「語法上の術語に関する聯合委員会報告」(pp. 1—45)、後編は「術語制定に関するネスフィールド氏と常設委員との論争」(pp. 46—65+x) について述べたものである。

イイダ ヒロシ「英語の綴字改良運動」『國語運動』第1巻第4号 pp. 44—49 昭和12年11月
イイダ氏は、「わが國のかなづかい改正について、参考になる点も少くないと思って、次に現在の S.S.S. の会長であり、古語の權威的学者であるギルバート・マリ Girbert Morry が「アウトルック」紙に発表した英語綴字改良論の大意を紹介する。」として、英語のつづり字改良運動をしている三団体をあげて簡単に説明し、ついで「英語の綴字改良 (ギルバート・マリ)」pp. 46—49 の訳を掲げている。

N. N. O. 「イギリスにおける放送用語統一運動」『國語運動』第1巻第5号 pp. 60—58

昭和12年12月

この論文の項目は次の通りである。

諮問委員会の構成

放送用語統一の意味

外國語

アクセント

アクセントの無い母音の音

結論

これは、Broadcast English, 1935 にある Prof. A. Lloyd James の緒言によつたものである。

高根町五「イギリスおよびアメリカにおける國語問題」『國語運動』第4巻第5号
pp. 41—43 昭和15年5月

若林方雄「國字問題なきアメリカに國字問題をさぐる」『國語運動』第5巻第9号
pp. 12—23 ; 第5巻第10號 pp. 21—28 昭和16年9月10日

前の号においては「日本語を外から眺める」と題し、後の号においては「アメリカの交通立て札を中心として」と題して述べている

保科孝一「英國における綴字改良運動の近狀」『國学院雜誌』第19巻第12号
pp. 36—53 大正2年12月

保科孝一「北米合衆國における綴字改良最近の運動」『國学院雜誌』第20巻第6号
pp. 35—47 大正3年6月

太宮健太郎「米國語の發生とその特徴」『コトバ』第7巻第1号 pp. 94—108

昭和12年1月 文学社

附記によれば、この論文は「昭和十一年十月十四日から二十三日まで、五回にわたつて、大宮氏が東京中央放送局から放送した英語講座の概要であつて、「専ら平易な学習を目的としたもの」であることをこゝとわつてある。次に項目を示す。

一、序 言

二、米國語の發生

(一) 標準語の相違

(二) 自然的發生

(三) 人爲的發生

(四) ノア・ウェブスター (Noah Webster) の功績

三、米國語の特徴

一、綴り字 (Spelling)

二、発音 (Pronunciation)

三、用語 (Vocabulary)

結語

- Evans, W. R.: A Plea for Spelling Reform. 16mo. 1877 (明治10年) London.
- Gladstone, J. H.; Spelling Reform, from an Educational Point of View.
Second edition. 12mo. 1877. London.
- Evans, W. R.: Vo'cal Speling. 1879. London.
- Evans, W. R.: In'glish Vocal Deigrafs. 1879. London.
- Rundell, J. B.: English Spelling Reform in 1880.
- Soames, L.: Scheme of English Spelling Reform. 1880. London.
- Ellis, A. J.: English Spelling Reform. 1881.

- Nicholos, R. C.: English Spelling Reform. 1881.
- Sweet, H.: Spelling Reform and the Practical Study of Languages. 1885. London.
- Skeat, W. W.: The Problem of Spelling Reform. (From the Proceeding of the British Academy, Vol. II.) 1906. London.
- Skeat, W. W.: On the History of Spelling. 1908.
- Lounsbury, T. R.: English Spelling and Spelling Reform. 1909. New York.
- Lanyon, W.: Odes of Folly, An Attack on the Citadel of Orthodox Spelling.
12 mo. 1911. Melburn.
- Rippmann, W.: Simplified Spelling. 1911.
- The Pioneer. 1912—14.
- Wells, H. G.: The Star. (In Simplified Spelling) 12mo. 1913. London.
- Simplified Spelling An Appeal to Common Sense. 12mo. London.
- Jackson, Robt.: A Sekond Reader in Simplifyd Speling. cr. 8vo, 54p. 1917. London.
The Simplifyd Speling Sosyeti.
- Jinglez and storiz in simplifyd speling. cr. 8vo, 27p. 1918. London. The Simplifyd Speling
Sosyeti.
- ^{トヤベ}鳥谷部陽太郎「英國の Spelling Reform の運動」『Rômaji』第14卷第10号 大正8年10月

- Dewey, Melvil.: Simpler Spelling Reasons and Rules. (Dewey, Decimal Classification and Relativ Index, Edition 12, Vol. I.) pp. 49—63 1927
- Anglic, eduekaeshonal revue. 8vo.(16.5×24cm) 始め 16p. Vol. II から 32p. 月刊 1930年9月 創刊 Sweden, Uppsala.
- Zachrisson, R. E.: Anglic, a new agreed simplified English spelling. 8vo, paper, 40p. 1931. Uppsala, Anglic Fund. A.-B.
- The Anglic Illustrated. 20p. 隔週発行 1931年5月創刊 1931年9月以後 “Anglic” に合併 Sweden, Uppsala.
- 栗飯原晋「英語の世界語化難」『Revuo Orienta』第12巻第5号 p. 142 昭和6年5月
平岡伴一氏によれば、「Uppsala 大学の R. E. Zachrisson サクリソン教授が提唱している Anglic という英語の綴字改良法の紹介」である。
- 磯崎章「綴字改革運動について」広島文理科大学『英語英文学論叢』第1巻第1号 pp. 167—169 昭和6年11月
平岡伴一氏によれば、「英米における綴字改良運動の起因，歴史，現状，及び将来について簡潔に興味深く書いたもの」である。
- Burbank, J. H.: What is Standard English Speech? (慶應英語英文学会, English Literature and Philology Annual 1930—1931, Vol. II.)
平岡伴一氏によれば，南方英語ので Received Pronunciation の欠点を指摘し，全英語諸國民に通ずる Standard English の確立を望むという説である。

- Ogden, C. K.: Basic English. 24mo. 100p. 1930. London, K. Paul.

平岡伴一氏によれば、850語で日常の簡単な思想の交換から、学術文学などの複雑な思想の発表に至るまですまそうとする Basic English の規則、文法を述べたものである。

- Shaw, G. B.: Spoken English and Broken English.

- Frank, L.: Carl and Anna. 1930.

この二書は Basic English で書かれたものであるという。

- Ogden, C. K.: The Basic Vocabulary. 1930.

- Ogden, C. K.: Brighter Basic, 1931.

- Ogden, C. K.: Basic English Applied (Science), 1931.

- Ogden, C. K.: Debabelization. 1931.

- Lokhart, L. W.: The Basic Traveller. 1931.

この五書は Basic English の参考書である。なお『われらの化学』第4巻第9号の中瀬古六郎博士の文参照。

ド イ ツ